

よりよい世界を創造するために



荒谷卓

明治神宮武道館「至誠館」館長

【特殊作戦群の創設】

私は、陸上自衛隊に29年在職し、一般の自衛官と同じように、部隊、防衛行政、研究開発、国際交流等の経験を積んできましたが、ただ一つ一般の自衛官とは異なるのは、特殊作戦に携わった点です。

平成15年、米軍特殊作戦学校通称「グリーンベレー」に留学しました。とはいっても、学生として教育を受けているだけでは、特殊部隊の立ち上げには用を成さないの、米国に行ってから特殊作戦学校の校長に何度もお願いして、実質上、LOのように、校長室の隣に執務室を頂き、アメリカ軍の特殊作戦がどのような仕組みで運営されているのか、組織の構成、政治との関わり、通常の軍事作戦の教育との違い等を全般的に研修させて頂きました。



それらを持ち帰って部隊の立ち上げ準備に取り掛かりましたが、何せ米国と日本では政軍関係が全く違います。

特殊作戦と通常作戦の違いは、一言で言えば政治との関わり方の違いであり、特殊部隊は、平時からまさに政治機能として運用されているという点です。

それは米国だけではなく、イギリスのSAS、ドイツのKSK、オーストラリアのSAS等殆どの国が軍事、外交、情報、治安等を包括的に兼ね備えた実力部隊として特殊作戦部隊を運用しています。

例えば、グリーンベレーの平時の指揮は国務長官や当事国の大使の下に置かれ、時にはホワイトハウス直轄になる。期待されるのはまさに政治活動そのもの、アメリカが推し進めるグローバル資本主義をいかに世界に拡張し定着させるかがその目的です。

ブッシュ大統領の時に改定された陸軍の教範の頂点「OPERATIONS」では、アメリカの新しい戦略「テロとの戦い」をどの様に認識するかが明記されています。その中では、『グローバル化は、失敗のリスク

が大多数の者にもたらされる間に、富の恩恵が少数の者の手に集中され続け、この富の不平等な配分は、しばしば紛争の種である「持つ者と持たない者」の状態を創出する』とあります。

そして、『この富の不平等な配分により、2015年では、世界の人口の約28億人程度が貧窮以下のレベルになるだろう』と見ております。貧窮以下のとは、自力で生きていけない貧しい状態のことです。しかし、この貧窮化した人達を救済するという事は考えておりません。むしろ、『世界的な繁栄を共有する』と言う果しえない望みを持つ貧窮は、『過激なイデオロギーを信奉する傾向に向かうだろう。』と予想しています。

つまり、アメリカの進めているグローバル資本主義は、必然的にテロリストを産む。そのテロリストの活動を予防し対処することが「テロとの戦いの本質」なのだといっているわけです。

これは陸軍の教範なので、簡単に書いてありますが、特殊部隊の教範では、もっと具体的に、例えばグローバル化のための政府転覆とか、アメリカにとって望ましい政権の維持とか。そういったことが、非通常戦と呼ばれる特殊作戦の概念区分になっています。ビンラディンの殺害のような作戦は、非通常作戦と言うよりは、直接行動と呼ばれる作戦区分に入ります。

アメリカ側は、当然日本もこういう活動の中に積極的に参加すべきだとの考えです。

しかし、日本にはそのような国民的合意はない。政府にも、そうした意思はない。そんな中で、自衛隊がようやく特殊作戦部隊を創設するというので、米軍側も積極的に支援してくれたのです。

しかし、私個人は、このような特殊作戦の実態を目にして、グローバル資本主義がこのまま進んで行っているのだろうかと思念を持ちました。

グローバル資本主義の考えに積極的に追随するというのが、本当に日本にとって良い事なのか、そういう疑問を持ったわけです。



帰ってきてから、特殊作戦群の創設に関りましたが、日本の政治環境は、そこまで進んでいません。また、軍事に関する日米関係もそこまで進展していません。世界の軍事作戦がグローバル資本主義の政治経済活動を中心に動いているという認識も、自衛隊にはありませんでした。

したがって、特殊作戦群の立ち上げから、戦力化には非常に難しいものがありました。

結局、日本が目指すべき戦略目標と、政治行政の実態に疑問をもち、平成20年に自衛隊の職を辞す

る決断をしました。

その時点で、明治神宮の館長に就任することは決まっていませんでした。たまたま、大学の時から通っていたのが、明治神宮の武道場至誠館で、その館長にはいろいろお世話になっていたものですから、自分の決心について報告に伺ったところ、後を継いで至誠館の館長になれとのことでした。そうした経緯で退職1年後、館長職を引き継ぎました。

【明治神宮至誠館館長としての活動】

武道場の館長になり、毎年、欧州を中心に武道指導に行きだして分かったことは、グローバル資本主義の方向性は、必ずしも世界的な賛同を受けていないということです。国際武道講習会に参加する多くの国の参加者が、グローバル資本主義に対して強い疑念を持っているのです。

日本では武道人口は減少しておりますが、海外では武道人口が急増しています。これは色々な背景があって一概に言えないのですが、多くの方々が日本武道に関心を示す理由は、その精神性にあります。

例えば、フランスでは、日本より先に青少年の倫理教育に日本武道を取り入れています。革命以来、世俗主義のフランスではありますが、世俗主義であるからこそ、人間の力で自らの精神性を高めていくというところに武道の価値を認め、フランスの青少年の教育に取り入れているのです。

東日本大震災があった平成23年8月、フランスで国際武道講習会を開催しました。その講習会に、フランスの青少年の倫理担当の大臣が訪れ、講習会を見学し食事を一緒にしました。彼は、そこで、東日本大震災の際に、日本人が見せた勇気ある倫理的な行動を絶賛されました。そして、その背景にはきっと武士道精神があるのだろうと言われました。

しかし、現在の日本では、武士道を教えているところは殆ど有りませんし、東日本大震災の被災者の大多数の人々も武士道を修養していたとも思えません。私は、どう答えたら良いのかと思いました。ただ、日本人共通的に、利他的共助の精神があることは間違いないのです。

私が、アメリカに留学した時、南部がハリケーンに襲われました。その地域が無法地帯になり、物の争奪状態で治安が乱れ、海兵隊が出動したことがありました。その様なことを見ていましたので、日本では、どんな大きな災害があっても、略奪や強盗のような事態がおこらないことは、彼らにとって驚くべきことであるというのは、よく理解できます。

東日本大震災で日本人が見せた利他的助け合い

の精神は、日本人に身についた精神文化ですから、何処でも助け合いの精神が働きます。これは何処からくるのかをフランスの大臣に説明しました。

自衛官として現役の時、日本の神道とか武士道精神とかについて、さほど真剣に勉強したことがなかったのですが、明治神宮武道場館長に奉職することになり、神道や武道精神について真面目に勉強するようになりました。

私が館長に就任して、平成21年に欧州に**国際至誠館武道連盟：International Shiseikan Budo Association (以下 ISBA)** という団体が創設されました。初代会長は、元在日ポーランド大使で、その後ポーランド外務大臣、現在はEUのデモクラティック・ファンドの常務理事をしています。

ISBA の設立の主旨には、「武道は日本の伝統文化に根ざしたもので、今日の世界的人類遺産の中でも極めて価値のあるものの一つである。日本武道の力と簡潔な美しさは、人間を惹きつける特有の精神と結びついており、そしてその精神は日本人のエートスとも言える基礎を形成している。それによって、我々は世界の運命を正しく豊かな道へと導くため、民族間の理解と親和を強化するに努めようと思う」と記しております。

この主旨で大事なのが、武道は日本の伝統文化であるのですが、実はそこには世界の民族に共通的に存在するエートスが含まれているのだと言っているところです。武道精神を決して日本固有と捉えていない。人類共通の普遍的精神価値が存在すると言っています。

平成23年には、同じ様な趣旨の組織がロシアに創設されました。ロシアのモスクワを中心に、サンクトペテルブルグからウラジオストックまでに広がる**至誠館武道共同体：Commity Shiseikan Budo Dojo (以下 CSBD)** という組織です。この組織の代表は、こんなことを言っています。

「武士道は私達に、人間の原点に戻ることを教えてくれます。心と精神と肉体が調和し、正しい判断のもと誠実に道徳的に行動することや、他人の利益のために自己を犠牲にすることを恐れない日本の武士道は、世界に類を見ない崇高な精神です。」

もともと、明治神宮至誠館では、東大、中大、専大、金沢大及び富山大等大学の合気道部等を指導していたのですが、最近では、モスクワ大、ハイデルベルグ大、シュトゥットガルト大にもクラブが出来ました。

これらのクラブでは、「至誠館武道は心身の涵養

に資するもので、世界をよりよくし得るものであると確信している。武道の修練が我々の社会、ひいては世界全体に重要な結果をもたらすと考え、その実現のため、また、自己の人生を築き上げていく上でも価値のあるものであると判断する。」と言う設立主旨を掲げています。

これらの組織に加盟する道場やクラブの人々は設立主旨に書いてある通り、武道の技術的関心だけでなく、精神的な関心が高いのです。

何故彼らがこんなことを言い出すのかということを知ると、現在のグローバル資本主義、自由競争主義が行き過ぎているという認識が背景にあるようです。

例えば、ドイツでは、「自国の民主主義的決定より優先してEUの金融機関の議決が優先されるというシステムはおかしい」と考えており、市場原理より民主主義が優先されるべきだと強く訴えています。

フランスなどでも、選挙戦の最大のポイントは、自由主義か民主主義かという選択です。

つまり、最近の先進諸国の選挙のテーマは、市場原理を秩序とするグローバル資本主義へ移行するか、国民の民主主義を守るかが大きなテーマになってきています。

1990年代までは、グローバル資本主義に対してはアンチ・グローバル運動しかありませんでした。アンチというのは確立されたポリシーが無い、ただ反対というだけでしたから大きな政治的勢力にならなかったのです。

今は、ポスト・グローバル資本主義という考え方が形成されてきており、明確に次の世界の方向性を出そうという段階まで来ています。

そうした世界的大きな潮流と、武道精神は関連しているわけで、彼らは、我々日本人が考えているよりもっと大きな意味で、日本武道の精神的意義を捉えているのです。

明治神宮至誠館では、海外から武道と神道の研修生を受け入れています。毎年1～2名の海外門人に対し、奨学金を出して、1～2カ月間、明治神宮至誠館で武道と神道を研修するのです。

その中で、昨年イスラエルから初めて研修生を受け入れました。その人は、イスラエル生まれの正統なユダヤ教徒です。

彼は、オックスフォード大学の哲学博士で、大学で学生を指導していた非常なインテリなのですが、ヨーロッパの至誠館武道セミナーに参加して、日本の神道と武士道の精神性に強い関心を持ちました。そうして彼は、どうしても日本に行き、日本の神道と武道を勉強したくなかったらしいのです。

しかし、ユダヤ教では、ユダヤの神以外を信ずることは禁止され、神道も自然崇拝として否定されています。それでも、ジョナサンは日本の神社に行って研修を受けたくて、親族会議が開かれたそうです。そこで、アメリカ国籍で、先の大戦時、アメリカ空軍のパイロットとして従軍し、日本国内で墜落して捕虜として福岡の捕虜収容所に終戦までいたという伯父さんが、親族に対して説明した言葉は、「私は、アメリカ人として従軍したが、米国社会でユダヤ人は常に疎外感を受けていた。驚くべきことに、捕虜として日本での生活の間、そのような差別感を全く感じることはなく、自分にとって最も心の安心を得た期間だった。イスラエル以外で自分が受け入れられた社会は、日本だけであった。」というのです。この伯父さんの言葉で、親族の同意を得て、彼は研修に参加することを許されたそうです。

彼本人も、ヨーロッパで暮らしても、アメリカに行っても、常にユダヤ人としての疎外感を感じるが、日本では心地よい受容の空気を感じるといいます。

神道の祭典に参加した彼は、『信仰の義務付けが存在しない神道は素晴らしいと思います。これは私が今まで出会ったことのない宗教観です。神道では、厳格な規制や考え方が無いために幅広い多様性と自由が生まれるのです。』と語っています。

また、彼は研修成果報告の中で次のように記しています。『日本の「調和」の精神は心を和らげてくださいました。調和と共助の要素を持つ日本社会がどの様に構成されているのか、自分自身に問いかけてみました。私達は皆、恩恵を与えてくれた祖先に借りがあり、その借りを次世代に返す役割があります。この恩恵に対する「感謝のこころ」は伝統的社会では受け継がれていても、個人主義的な現代社会では失われています。日本の社会には「感謝のこころ」がしっかりと認識され、存在していることを知りました。この「感謝のこころ」が、日本だけでなく世界の国々の多くの文化で共感できる価値観だと、思います。この「感謝のこころ」を持つことによって、人々が同じ土台に立てるのです。』と。明治神宮での研修を期に、彼は毎年日本に来て、神道と武道精神を学び続けています。将来は、母国イスラエルと日本で半々の時間を過ごせるようにしたいと考えているようです。

日本人の中にはこういう受容と和の文化が自然に根付いており、彼の伯父が言ったように、他者を排除しないという社会の空気があると言うことは、派他の外国人も皆、共通して指摘するところです。

神道には教義のようなものは有りません。神社だけではなく、自然や祖先とのかかわりで、夫々の人が感じるものが神道であり、彼が感じたのが、彼に

とっての神道となるのです。

グローバル化した社会だからこそ、むしろ価値観の多様性を本当の意味で共用できる、お互いが尊敬を持って存在しえる日本の文化は重要です。

神道では、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒であるかどうかなどということ一切問わないのです。神社がそうであるように、あらゆる人々条件を付けずに受け入れる。こういう受容性が非常に大事で、日本人が当たり前だと思っていることが、実はすごく特異で素晴らしいのだと彼は言う訳です。

5年前に、ポーランドで至誠館武道セミナーを開催した時、イギリス人の参加者の方の親友がアフガニスタンで亡くなったという訃報が届きました。そのイギリス人は、非常に悲しまれ、セミナーへの参加を継続できないと言ってきました。

至誠館武道のセミナーでは、開会式と閉会式は神道の祭典を執り行うため、常に神官が同行しているのですが、そのときのセミナーに同行していた明治神宮の神官が、「それでは貴方のご親友の鎮魂祭をやりましょう。」と提案したのです。

次の朝、早朝にみんなが集まって、会場にある一番大きな木にしめ縄を張って、鎮魂祭を執り行いました。その時の神職の祝詞は、「かけまくも、かしこきキリストの大神の御前にかしこみかしこみも白さく・・・」と、亡くなった方が信仰していたキリスト様に鎮魂をお願いする内容でした。



そしたら、そこに集まっていた約100名の欧州各国の参加者は、皆大感激なのです。こんなことがあるのかというぐらいの大感動なのです。インター・レリジョンとでも申しますか。宗教の境界を意図も簡単に乗り越え、鎮魂祭を為しえたのです。

それ以来、海外での武道セミナーで神官は、大人気です。

また、祭典で使用した、しめ縄や幣帛を頂けないかなどと言う人もいました。

実は、ポーランドの人は90%以上がカトリックですが、カトリックに改宗する前のスラブの民族神話があって、その民族信仰の様子を描いた絵が残っています。その絵を持ってきてくれて、それを見ると、木に縄を巻いて、神道の祭儀と同じ様なことを行っている絵があるのです。

彼らのスラブ民族の祖先は同じ様な信仰行事をしていたのではないかと彼らが言い出し、だから神道の祭儀の道具をくれないかと。

同じように、ドイツで神道の祭典を執り行ったときも、神道の祭儀はゲルマン人の森の信仰そのもの

だと言っていました。

人類共通のエートス (ethos : 一般に、ある社会集団・民族を支配する倫理的な心的態度のこと) があるというのは、そういう意味なのです。

欧州においては、キリスト教の布教と近代の世俗主義によって社会の価値観が一転二転して、それまでの民族信仰は根絶やしにされてしまいました。彼らの元々の民族的価値観が、一体どのようなものだったのか分らなくなっているのです。それに比して、日本は、弥生時代からの信仰儀式をいまだに生きた信仰として守っている。そこに彼らは、価値と普遍性を感じ、ポスト・グローバリゼーションのトリガーになるのではないかと考えているのです。

一昨年、ジュネーブで開催された武道講習会に指導者として呼ばれました。開催場所は、**欧州原子力核研究機構 (CERN)** という世界最大の**素粒子物理学**の研究施設です。ジュネーブとフランスの国境に跨って地中に27Kmの超伝導のサークルを2本作って、超高速で原子を飛ばし途中で衝突させて原子を破碎し、素粒子を観察している実験場です。少し前に、ヒッグス粒子等質量のない素粒子を発見したことで有名です。

いまや、物理学は、ニュートン力学の時代は終わって素粒子の世界になっている訳で、その最先端の実験施設に、武道講習会の指導者として呼ばれて行ったわけです。

この施設では、宇宙はどのように出来たのかということを実験的に証明しようとしています。大体今分っているのは、宇宙の最初には物質は無かった。つまりエネルギーのような非物質しかなかった。その非物質が高密度に凝縮したところで、ビッグバンが起きて、エネルギーが拡散していく中で物質が凝固し星が出来た。その物質は、一定期間経つとまた非物質に変換する。こういうことは、実験で証明されているそうです。

宇宙には、ビッグバンのようなプラスのエネルギーと、正反対のマイナスのエネルギーも有るのだと。マイナスのエネルギーとはブラックホールのようなものです。

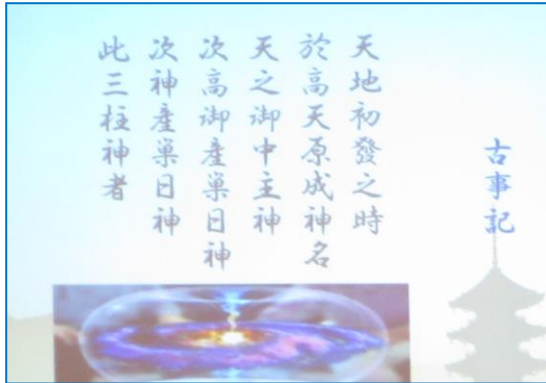
これは、ヨーロッパ人の人々にとって非常にショッキングな実験でした。特にキリスト教の信仰者やニュートン力学に閉じこもった科学者には、今まで正しいと思っていたことがどんどん否定されていく。非常にショッキングなことです。

さて、そこで何故私をよんだのかという話とかかわってくるのです。

日本の神道の宇宙観、自然観、人間観とはどういうものなのか、ということです。

【神話にみる日本文化の源泉】

私はそこで「古事記」の話をしました。



古事記の冒頭は、『天地（アメツチ）の初まり、高天原（タカマノハラ）に成った神の名は、**天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）**』と書いてあります。

神道に、統一した解釈は無いのですが、一つの解釈として、宇宙の最初は、中心としてのエネルギーが成り顕れた。その中心エネルギーを**天之御中主神**とよんだと。中心が出来ると同時に、**高御産巢日神（タカミムスヒノカミ）**と**神御産巢日神（カミムスヒノカミ）**が成り顕れた。

「ムスヒ」とは**産霊**とも書き、現代語で言う「むすび」です。つまり、何かを生み出す創造エネルギーのことをいうのです。高御産巢日神は膨張するエネルギー、神御産巢日神は収縮するエネルギーです。

ですから、神道の宇宙観では、中心と、中心へのエネルギーの集中、中心からのエネルギーの拡張によって、創造活動が始まったという考えです。

上の図に、トーラス・エネルギーのイメージ絵が書いてあります。中心が出来ると中心の周りをエネルギーが循環・還元するという宇宙の基本構造は、素粒子物理学でいっている宇宙創造のイメージで、日本神話のイメージも最新の素粒子物理学と全く同じではないかと話が盛り上がりました。

トーラスの形状を、中心へとエネルギーが入っていく方向から見るとブラックホールです。反対から見るとエネルギーが出てくるビッグバン状態になる。

武道では、これを陰陽一体といて、気エネルギーの循環としての一つの理合いです。武道では、心身の中心である丹田に気を充実させ、丹田を中心に気と力を循環・還元させるわけです。

最先端の科学と日本の武道がどう噛み合うのかと最初は心配しておりましたが、セミナーを通じて、参加者と色々な話をしながら稽古をしているうちに、CERNで実験している宇宙の真理を、武道では自分

の心身を素材にして探求している。

つまり、個人も宇宙も、素粒子物理学の真理も武道の心理も夫々がハーモナイズされているのだということに参加者は興奮を覚えておりました。

武道セミナーでは、**産霊（ムスヒ）**についても少し詳しく説明しました。

ムスヒつまり「結び」という言葉は、日本では、例えば男女が「結ばれる」という具合に使います。男女が結ばれたエネルギー（霊）が子に成る。霊が男になるので彦（ヒコ）、霊が女なら姫（ヒメ）になる。また、「産す（ムス）」のが男子（オノコ）だとムスコ（息子）、女子（ヒメ）だとムスメ（娘）になる訳です。

武道にも「結び」があります。剣と剣を合わせることを「斬り結び」と言います。切り殺すとか、切り倒すという発想を越えた、「切り結び」という言葉には、戦いにおいてさえも、敵の殺傷ではなく共生と創造を託す思いがこめられています。

この様な武の考えの源泉は、日本神話の中の、「**国譲り**」という話の中にあります。

高天原の使者である**武甕槌大神（タケミカヅチノカミ）**、この神様は鹿島神宮の御祭神で、武の神様ですが、この武甕槌大神が**大国主神（オオクニヌシノカミ）**と国譲りの交渉をします。

このとき、武甕槌大神は、大国主神がウシハク統治すなわち私権による統治をしていることは宜しくない、天孫によるシロシメス統治、すなわち人々の心を知る統治が大切なのだという話をします。

大国主神はこれに納得します。しかし、息子の猛々しい**建御名方命（タケミナカタノミコト）**は賛同せず、武甕槌大神に戦いを挑んだのです。

いざ戦うと、武甕槌大神の武威は凄まじく、圧倒された建御名方命は、逃げに逃げ諏訪湖の湖畔に来て降参をしました。これに対して、武甕槌大神は殺すことなく、そこにお社を建てて建御名方命の武威を祀ったのが諏訪大社。それから日本で一番大きいお社である出雲大社を建てて、大国主神をお祀りした。ここには、勝った者が負けた者を尊び敬うという思想が出てくるのです。

私は、ドイツでケルンの大聖堂を見ました。ケル



ンはローマの植民地でした。ローマ・カソリックの大聖堂の真下にはゲルマンの御社跡があり、それが発掘されて見学できるようになっています。つまりローマ軍が侵攻した時に、ゲルマン民族の神の社を潰して、その上に教会を建てキリスト以外の神を抹消していったのです。

日本では、全国に、その土地の神様、里の氏神様等天照大神系でない神様の神社がいっぱい残っています。つまり信仰上の排他的活動はしなかったという証です。

日本の武神は、戦いの後は相手を尊び、その尊厳を損なわず祀ったのです。これが、武士の礼といわれることの根底の発想になっています。

戦略論では、クラウゼヴィッツと孫子が有名ですが、この戦略論は、敵味方論になっております。

自分の価値に同意しない敵を排除するのが、今のグローバル・スタンダードのやり方、すなわちクラウゼヴィッツや孫子的な戦略論なのです。

これに対して日本の戦略論の代表である、**楠正成の遺訓**を見てみたいと思います。

兵を学ぶ法は、心性を悟り庶民を親愛するを上とし、計謀によって学ぶを中とし、戦術をむさぼり習うを下とする。〈中略〉

将に徳あるときは、敵の兵必ず我兵となり、敵の民我民となる。

将に智あるときは、敵の謀我謀となし、敵の利もまた我利となる。

将に勇のあるときは、敵の威我威となり、敵の能我能となる。

この三徳を以て、明らかに方法を明察し、敵の謀に乗じて、却ってこれを覆す、これ名づけて上将の軍法とす。

中将は、自らその徳を積まず、その功を求め、ただ敵の謀を察し、その計略を欺き、我謀を多くして、敵を殺さんことを用いて、敵の生ずるところを知らず、十度戦いて十度勝と言えども、未だかつてその太平を知らず、これ中将の法なり。

下将は、ひとえに戦いを好んで、利を争い、士民を使うに怒りを以てし、人を従えるに専ら殺罰を用い、己の勢いを頼んで敵の智謀を悟らず。〈以下略〉



正成が「上」としたのは、「心性を悟り庶民を親

愛する」兵法です。つまり、庶民との調和です。ですから、「徳」、「智」、「勇」を「調和と均衡の徳」「調和と均衡の知恵」「調和と均衡の勇氣」と読み替えてみると言わんとしていることがよくわかります。

調和と均衡をもたらす戦略により、敵の兵も、敵の民も、敵の謀も、敵の利も、敵の威も、敵の能力もすべて我のものになるということです。傑出した和の兵法です。事実、彼は、圧倒的に少ない兵にもかかわらず庶民の力をもって鎌倉幕府を倒しました。

「中」の将は、「調和と均衡」の考えがないものだから、十戦十勝しても、世の中を平和にできない。現在の米国を見れば、言い得て然りです。

「下」の将に至っては、調和どころか辺りかまわず対立をせっせと作るばかりで、結局は自滅することになる。

クラウゼヴィッツの戦争論も孫子の兵法も優れた理論であります。敵は敵、味方は味方という前提です。チェスと一緒ですね。敵の駒は終始敵の駒、味方の駒は終始味方の駒、ところが将棋の駒は取ると我が駒になりますね。死に駒が一つも無い。敵の兵も自分の兵になるのだと。敵の民は、我が民となる発想が日本の戦略にはあるのです。

これは、クラウゼヴィッツや孫子より一段上の戦略的発想です。特に、今のグローバル化した世界で、敵は敵、イスラムは絶対ダメなんてやっていますと、永久に安定した秩序構築は出来ないでしょう。

だから、テロとの戦いは、どんどんエスカレートしている訳です。終わりが見えてこないのです。楠正成の軍法「敵をして、敵の民を我が民とする。」そういう考えを基にしないと現状の問題は解決しないでしょう。

【日本建国の理念と自衛隊の活動】

そもそも、日本建国の思想は、**神武建国の詔**に記されております。

「夫（それ）大人（ひじり）の制（のり）を立て、義（ことわり）必ず時に随う。苟（いやしく）も民（おおみだから）に利（くぼさ）有らば、何（いか）にぞ聖造（ひじりのわざ）に妨（たが）わん。且（ま）た当（まさ）に山林（やまばやし）を披（ひら）き払い宮室（おおみや）を經營（おさめつく）りて、恭（つつし）みて宝位（たかみくら）に臨み、以て元元（おおみだから）を鎮むべし。上（かみ）は即（すなわ）ち乾靈（あまつかみ）の国を授けたまう徳（うつくしび）に答え、下は皇孫（すめみま）、正しきを養いたまう心（みこころ）を弘めん。然（しか）して後に六合（りくごう）を兼ねて以て都を開き、八紘（あめのした）を掩（おお）いて宇（いえ）

と為（せ）んこと、亦可（またよ）からずや。」

国の制度は、国民（おおみたから）が幸福になることを第一に考えなくてはならない。天津神の御期待にこたえ国民が幸福になるために天皇は御位に臨む。国民は天皇と心をつにして、天下に一つの家のような国（国家）を作り為すよう天皇と国民が共に努力しようではないか。「八紘為宇」という国民への呼びかけです。

聖徳太子が17条の憲法でいう『和をもって貴しとなす』も、明治天皇が5箇条の御誓文に記した『万機公論に決すべし』も、そして現在、『思いやり』『絆』等とっているのも全て八紘為宇の『和』の精神です。だから国の名も『大和』と定めたのです。

この話を、ISBAやCSBDのメンバーが英語、ドイツ語、ロシア語、フランス語に翻訳してネット上で拡散してくれています。

実は、ゴルバチョフ大統領が冷戦終結の時に言った言葉の中で、最も重要だと言われているのが「ヨーロッパを一つの家に」というスピーチでした。

彼らは、神武天皇の詔勅、「世界をひとつの家に」と言う意味の八紘為宇には非常に賛同を示しているのです。

こう考えていきますと、これからのグローバリゼーションの方向性をどうするのかという大きな課題の中で、世界の人々が、ポスト・グローバル資本主義を模索している段階と思いますが、実は、日本人は答えを持っているのではないかという気がしているのです。

実際、日本の自衛隊が国際貢献活動を始めて以来、殆どのケースで現地の人々からポジティブな評価を受けてきました。参加した自衛官は、皮膚感覚でそれを感じてきたと思います。少なくとも欧米の部隊がやってきた活動と日本の自衛隊がやってきた活動とは性格が本質的に違うと、世界中の人々が認識していると思います。

それは政府が戦略を練ってやった訳ではなく、日本人がそもそも持っている文化的性質、日本人の利他の精神、和を尊ぶ性質が現地の人々の為に出来ることを一生懸命に頑張ろうとする形で現れたからだと思います。

せっかく日本人はこうした文化を持って、実際に素晴らしい活動をしているのですから、自分たちの中にある優れた文化価値を自覚して、それを戦略化して、国の活動の方向として示したら良いのではと考える訳です。

私も、サマワでの経験などから、自衛隊は、他の国の部隊と違って、現地の人々のために真に貢献で

きる貢献活動をしてきたと感じました。

しかし、そうした自衛隊の活動が、日本の政治的成果として生かされていないことが、非常に残念でなりません。

自衛官が世界で実践していることを、日本人が持っている文化的ポテンシャルを、日本人のわれわれが自覚化する。そしてそれを理論化し、世界の人々に発信する。そういうことが本当の意味で、日本の安全保障にとって重用なのだろうと思います。

これから、自衛隊の海外での活動がより一層増えてくるわけですが、ただ単に日米関係を維持することだけが目的化しているのが現状ではないでしょうか。

活動の目的とそれによってもたらされる結果を深く考えずに、アメリカの要請であるから・・・、これでは本当に日本にとってプラスであるのかが不明瞭です。少なくとも、現在の米国のやり方は世界的に批判されることが多く、賛同されることは少ないようです。そのような活動に何も考えずに追随していくことは、長い目を見たとき、決して日本のためになることはないでしょう。

神武建国以来、「一つの家のような国家の創造」、という考えで国を運営してきたことが、『世のため人のため』という社会倫理に昇華し、無自覚で利他の精神を発揮できるまでに進化したのが日本文化です。

武士道精神とは、さらに自己犠牲もいとわず社会に貢献する崇高な精神です。

そして、それは、まさに現代のグローバル化した世界が必要としているものだと思います。

だからといって、これを厭らしい形で日本人は優秀で日本人にしかできない等と言う必要はありません。むしろ、謙虚な形で世界の人々の賛同を得ていくやり方がいいと思います。余り出しゃばるとアメリカが傍観しないでしょうから目立たないやり方がいいでしょう。

いずれにしても、日本の国際貢献活動において、日本の伝統文化がよりよい世界を作るために活用され、世界の人々の和と調和を生み出し、日本と世界の将来をよい方向に導いていく成果となって積み上げられる。そういうことが出来たら素晴らしいのではないかと考えています。

私は、少なくともこういう価値観を、武道を通じて世界中の人々に一生懸命発信して、日本文化には、今世界にとって必要な崇高な価値観があるのだ、ということだけは、しっかり伝えていこうと考えています。